
さよなら、ベイバー

山内 詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、ベイバー

【Nコード】

N7073V

【作者名】

山内 詠

【あらすじ】

極悪非道の荒川課長に今日も容赦なくダメだしを食らう岡崎美穂子の防衛術はメイクだった。どS俺様課長と頑張る女の子のお話。中編の予定。活動1周年記念リクエスト作品です。

武装

面倒くさいって、女同士で集まったりしたら、たまに言い合ったりする。

女って確かに面倒くさいよね。グラム単位で体重の増減気にして、お通じ悪ければすぐにお肌にでちゃって、毎晩お風呂に入るたびに時間をかけて、それこそ爪の先から頭のとっぺんまで磨いて手入れして整えて。

だけど男の人から見ればそれが楽しそうに見えたりするみたい。楽しいとか思っていないとやってられないよ。女って大変なの。ちょっと手を抜けばすぐに「女捨ててるんじゃない？」なんて言われちゃうし。

だから今日も私は気合を入れて準備をする。

洗顔したらローションパックして、はがしたらさらに化粧水をこれでもかっつけてくらい追加してパッティング。潤えー、潤えーって念じながら美容液つけて、日中用のUVカット成分入りの乳液でフタをする。これで第一段階終了。

ここからやっとメイク突入。

下地にコンシーラー、ファンデはお肌の調子によってリキッドとクリームとパウダー使い分け。今朝はちよつとファンデのノリがあんまり良くない気がするから伸びのいいリキッドチョイス。今日はシヤドウ何色にしようかな。いいや、無難にあんまり派手にならないブラウンゴールドにしよう。一重の私の目は何にも塗ってなければ本当に寂しい。自分の顔で一番嫌いなところ。

だから念入りにシヤドウを塗る。アイラインはジェルとリキッドの二段使いでぐりぐり粘膜を埋めたら目の周りをぐるっと囲んで。それでようやく普通位の大きさになるように思う。

仕上げにつけまつげをつけて、自前のまつげと一緒にビューラーで挟んでマスカラを塗る。ようやくこれでいつもの私の顔。仕上げに眉毛描いて、ハイライトとノーズシャドウにチークでおしまい。

お気に入りのジルスチュアートの手鏡の中にはこれでもかってくらいの盛りメイクの女がいる。

ばっさばさのまつげ、気持ち悪いなんて言われていることは、知っている。派手なギャルみたいなメイクだと言われていると、わかっている。

だけれど止められない。

これは私にとって武装なのだ。

だって、たつぷりメイクしていたら、泣こうと思ったって泣けないじゃない。

黒い涙流したくなんかないもの。泣いたらつけまつげだってとれちゃうし。

だから、私はメイクしなくちゃいけない。

泣きたくなくなるくらいしんどい毎日をやり過ごすために、私はメイクをする。

出かけたくないくらい気分が落ち込んでいる時こそ、メイクをする。せつかくメイクしたなら誰かに見せたい。ただ塗って落とすだけなんて悲しいから。

昨日はネイルも新しくした。仕事の邪魔になるから短めだけどピンクベージュのフレンチにラインストーン。綺麗な指はテンションを上げてくれるよね。コテで巻いた髪もばっちり、決まっている。

うん、大丈夫。今日も頑張れる。

「却下」

書類が机に大きな音を立てて投げ出される。2日ばかりで作った企画書、全否定。それでも勇気を振り絞って、直訴する。

「やり直しさせてください」

「いらん」

「……わかりました」

投げ出された書類を抱えて、頭を下げた。周囲から同情のような、憐みのような視線を感じる。

悲しいことに、これはいつものことだった。

せめて具体的にどこがいいとか悪いとか、言ってくればいいのに。イエス・バットはビジネス会話じゃ重要じゃないのか。

なんて言えないのは極悪非道と評判の荒川課長相手だからだ。

荒川課長はむかつくぐらい仕事ができる。何しろ日本の最高学府出身で留学経験まである。さらに顔もよし、背も高い、出世頭、となれば女の子はほっとかないはずなのに、会社の女の子はみんな避けて通る。

既に綺麗どころが散々返り討ちにあっているというのもあるけれど、一番大きいのは優秀すぎるから。

課長は自分があっさりと出来ちゃう分、出来ない人に容赦が無い。

そして出来ない人の気持ちを知ってくれない。

確かに仕事じゃ経過なんて結果の前じゃ全く意味が無いってことは当たり前だけれど。努力のどの字も認めてくれない相手じゃ、恋愛したいなんて思わないでしょ。

スパルタすぎる荒川課長のおかげで、ウチの課の業績は上がっている。……だけどその分課内のストレスもうなぎ登りだ。

一人目は黙って次の日から来なくなった。二人目は他の支店に転属願いを出していなくなった。多分三人目が、私だと、思われている。

荒川課長が上司になる前は、優秀ではないけれど普通くらいに仕事ができると思っていた。それがどうだろう。やることなすこと全てにダメだし。入社以来コツコツと積み重ねてきたつもりの経験や自信は、あつという間に粉々。

この企画書だって、すっごく頑張って作ったんだけどな。頑張りだけじゃどうにもならないって、理解しているけどさ。

「おい岡崎」

席に着こうとした私の背中を極悪非道の声が追いかけてきた。

「お前もう企画とか作らなくていいから。茶入れてこい」

メイクがつつりしてきてよかったと思うのは、こんな時。

「……はい」

ぱんぱんに膨らんだメイクポーチを持って、給湯室へ向かう。メイク、直さなくちゃ、終業まで、頑張らなきゃ。

慣れ

悔しい。

さつき提出した企画書全否定ももちろん悔しい。

ただど何が一番悔しいかって、私を全否定されたのが、悔しい。

あの極悪非道は仕事に直接関わることに以外に言葉が全然足りない。

だからウチの課の人たちは省略された言葉の意味を察する能力を身につけてしまった。というか、身に付けざるを得なかった。

だから、わかる。

お前もう企画とか作らなくていいから。

あれはもう二度と企画書を作るなってことだ。

しかも私がさつき提出したものを訂正なりしてまた持っていくってわかっていて、言ってるんだ。

給湯室に駆けこんでポーチを漁る。二つ折りの携帯鏡、綿棒、ティッシュ、目薬、ウェット面付きの脂取りシート、ルースパウダーを流しの横力ウンターにぶちまけた。

「……っっ」

上を向いて嗚咽は呑み込む。目頭は綿棒とティッシュでガード。それで深呼吸すれば、涙はこぼれない。

極悪非道が直属の上司になって、2年。本当は慣れたくなんてないけれど、すっかり我慢することに慣れてしまった。

「はぁ……」

最後に大きく息を吐き出して、どうしようもないこの感情をやり過
ごす。

何度が瞬きをしてから、クール系の目薬を注す。そうしてやっと綿
棒とティッシュのガードを外すことができる。

涙でぬれた瞼や目の端の色がティッシュに吸い込まれたら、見たま
んまの色じゃなくて水溜りの油膜みたいな不思議な色になっている
って知ってしまったのは、いつだっけ？

黒という色の成り立ちは全ての色を同じ分量だけ混ぜたものって昔
何かで見聞きしたことがあったような。だから、涙に溶けたアイラ
イナーやシャドウは、まるで七色みたいに見えるのかもしれない。

手鏡の中には、ほんの少しだけ目を赤くした私がいる。よしよし、
メイク直せば、OKだよな？

綿棒で滲んだところを修正してラインを引き直して、脂取り紙で鼻
や目の下を抑えた後にルースパウダーをはたけば、ほら、元通り、
朝の私がまたこっちを見ている。

我慢することに慣れてから、メイク直しのスピードも速くなったな
とぼんやり思う。そんなスキルがアップしてもしようがないのに。
ぶちまけたメイク道具をポーチに押し込んで、お茶を入れたら。

さあ、また戦場へと戻ろう。

「遅かったな」

「申し訳ございません」

湯呑みを机に置けばまた、極悪非道と向き合わなきゃいけない。
何かの仕事から外れるってことは、それとは別の仕事しろってこと
なんだよね。簡単に人の仕事を全否定するくせに、仕事していない
状態をものすごく怒るんだ。理解するまで課内全員が怒鳴られたっ

け。

「今日中にやっておけ」

「……わかりました」

何も渡さずに期限だけ言うってことは、もう指示内容を社内メールで送ってあるということだ。本当に極悪非道は言葉が足りない。社内メールの内容を確認すれば、数値がずらずらと並んだだけの雑多な報告書をまとめた資料を作れというものだった。

今日中ってことは、恐らく週明けの会議で使うんだろ。ちらっと時計を見れば、１１時になるところ。

半日じゃ到底間に合いそうもないから、残業は確定だった。

「じゃあお先します、お疲れさまでした」

「お疲れさまでした」

ひとり、またひとり、と同僚は帰っていく。金曜日の夜だ、なるべく早く帰りたいのが人情ってもんだよな。

極悪非道のおかげでうちの課は社内では残業多めの部類なんだけれど、本日に限っては、私ひとりだけが残業のようだった。別にいいけど、予定ないし。

今夜帰る途中でレンタルショップに寄ろう。笑えるDVDを見ながらスナック菓子とナッツたっぷりのチョコレートとコーラと一緒に食べてやる。油っぽいものを食べると胃もたれするし太るから、普段は食べないようにしている禁断のフルコースだけどやっちゃうんだ。

これが終わったら思いっきりいつもは控えていること全部しちゃう

んだ。

だから我慢、我慢。

これでお給料もらっているんだから、頑張らないと。

「ひつでえ顔^{ソウ}」

なのに、思わず手を止めてしまうような言葉が横から投げつけられる。

……極悪非道のヤツ、まだ帰ってなかったのか。

「……………すみません」

不細工はどうしようもないし、もう夜遅いんだからある程度の化粧崩れは仕方ないだろうが！

だけどヤツとは視線を合わせないまま一応謝る。

あんたにそんなこと言われる筋合いなんてない！　って言えたらな。言えるわけないけど。

「お前ホントムカつくな」

一応とはいえ謝ったのに、極悪非道は隣の席の椅子にわざわざ座るとキヤスターを転がして近づいてくる。

「人と話すときはちゃんと目を見ろって小学校で習わなかったのか？」

なんでこの人って空気読めないんだろ。周囲には散々それを要求しているというのに。

そっちを向かないのは自信満々で、人を見下すような目しているってわかってるからだ。誰だってそんなの見たくない。

頼むから、絡まないでよ。今日は、さらっとかわせる余裕、無い。

「こっち向け」

それでも唇を噛んで、視線を逸らし続けていたら、急に顎を掴まれて引き寄せられた。

すごく近く、まるでこれからキスをするみたいな距離に、極悪非道荒川課長の顔。

ちくしょう、やっぱりかっこいい。男のくせに鼻の頭にもその脇にも毛穴が見当たらないのが腹立たしい。こちららコンシーラーにファンデでがっちり固めてやっと消せてるようなもんなのに！

今何か話したら、心の中の罵詈雑言が溢れそうな気がして、私はぐっと口を引きしめた。

不明

お互いの瞳にお互いの顔が鏡のように映っていると気付くくらいの間、課長は私から手を離さなかった。

私も抗おうとはしなかった。何かをしたら心の内の激情がありとあらゆるところから漏れてしまつかもしれないと思ったから。

だから傍から見れば、恋人同士が甘く語らっているように見えたかもしれない。

ふとそんなことが頭を過つてようやく、私は我に返った。

「放して、下さい」

そのたつた一言だけで最初の強引さとは全く逆、まるつきり興味を失ったかのように課長は私の言葉通り手を離れた。

ただどこちらをじっと見つめることは、止めなかった。

一体なんなんだ。

課長が何を考えているか全く見当もつかなくて、胸に渦巻いている怒りに苛立ちまでもプラスされる。

「おい、帰るぞ」

はあ？ 何言つてんの？

「……私は仕事終わってないですから、課長お先にどうぞ」

言うなり私は課長へ向いていた顔を身体ごと元に戻した。やりたくもない仕事にやりたくもない残業。さつさと終わらせて帰ったら、思いっきり好きなことするんだから！

終わってないのは課長がたんまり寄こした仕事なんだよ！ って言

ってやれたら、本当にどれだけ心が晴れるだろう。

そのまま課長の方は見ずに仕事を再開する。

元データを整理して並べ替え、見やすくなるように一部はグラフ化する。量は多いけれどすごく単純な誰にでもできる仕事。それが似合いの、私。それくらいしかできないのが、私。そう示したのは、横にいる極悪非道だ。

「これ以降の残業は認めねえからさっさと終了しろ」

「……今日中とおっしゃったのは課長でしたが」

「はあ？」

極悪非道は同じことを二度言うことを嫌がる。朝令暮改はろくでもない上司のやることだって知らないのか。

自分でも己が部下に好かれていないってことはわかっているのだろうか。極悪非道だったらわかっていない気がする。何しろこちらの気持ちなど、全然考慮してくれないのだから。

仕方なく出来たところまで保存して、パソコンの電源を切る。ため息はこらえられなかったけれど。

課長の方は全く見ずに帰る支度を整え、私物入れにしている引き出しから鞆を引っ掴んで「お疲れさまでした」と去ろうとしたら。

「よし」

「ちよつ、なんですか!？」

課長は私の腕を掴んでぐいぐいと歩き始めた。大柄な男性の歩幅にはついていけなくて、足が絡まり、しまいには小走りになる。

そのままの勢いでエレベーターに乗せられて、それでも腕は解放さ

れない。

「あの、放してください」

「うるせえ。黙って言うこと聞いとけ」

一体何だっというんだ。極悪非道の考えていることはいつもわからないけれど、今はそれに輪をかけてわからない。そりゃ企画書の出来は悪かったかもしれない。だけど代わりに与えた仕事を中途半端にさせてどうするつもりなんだろう。

以前残業を控えるように通達があった時、虚偽の退勤をした後サービス残業をしていた人がいて問題になったことがあった。その人は上司から押し付けられて自分の能力以上の仕事を抱えていたから周囲は同情的だったけれど、労働基準監督署からの監査だかが入って総務にいる同期がかなりやかいなことになったとぼやいていたのは覚えている。それから残業の申請が確かに面倒になったもの。私と同じことをしそうだとしても、思ったのかな。……切羽詰まったらやるかもしれないけど。

「あの、別に仕事途中だったからって、戻ったりはしませんから」

極悪非道は「お前何言ってるの？」とばかりに目線だけをこちらに向けた。どうやら違ったらしい。

何か気に障る事でもしただろうか。一応極悪非道とはいえど理由も無く怒鳴ったりはしないってことは、わかっている。だから何かあるはず。でも今日は企画書全否定された後指示通りずっと資料作成していたから、付け入る隙は無かったと思うけどな。

エレベーターが1階に着いても課長は私の腕を放してくれなかった。扉が開くと同時に靴音をわざと立てているのかってくらい響かせて

エントランスを縦断していく。私はばたばたと無様な格好で引きづられるように付いていくことしかできない。

そのまま玄関を出て、ずんずんと大きい通りに向かって歩いていく。すれ違う人がちらちらとこちらを見ているのがわかる。どう見たっておかしいよね。

「あの、課長」

いい加減にしてくれ、と言おうとしたその時、突然目の前にタクシーが止まった。乗れとばかりに後部座席のドアが開く。

「行くぞ」

「えっちょっ行くって、どこに!？」

「俺の家」

「はあ!？」

そんなアホみたいなやりとりしているうちに、私はタクシーに押し込められていた。降りたくても乗降側にはしっかり課長が陣取っている。

さすがに一体どういうつもりかを問い詰めようと息を吸いこんだら、吐き出すタイミングで運転手さんの「どちらまでですかあ？」なんてちよっとお前空気読めよって言いたくなるくらいほんわかった問いかけに遮られてしまった。

「とりあえず上城東のローソンまで。近くなったらまた言います」

「かしこまりました」

無情にもドアは閉まり、タクシーは走り出してしまった。

不明（後書き）

次あたりから、デレます（多分）

訪問

ウインカーをつけてタクシーが車の列の中へ滑り込んでから、ようやく極悪非道は私の腕から手を離れた。何気に掴まれていたところがちよつと痛いんですけど。思わず反対側の手でそこをこする。

でもなんで課長の自宅になんか行かなきゃいけないんだ。家に連れ込んで説教？ 冗談じゃない！

本当に何考えてるんだろう。さっぱりわからない。

なんだかなあ。

思わずため息が出た。

理解不能の極悪非道にいいように振り回されて、何やっているんだろう私。

ヤツは私をどうしたいんだろう。

さつき膨らんだ反撃の勢いは膨らんだときと同じくらい急に萎れて、なんだかもうどうでもよくなってしまった。とりあえず乗ってしまったのだから、もうどうにもならないし。

私も課長も喋らないから、車内には運転手さんのギアを変える音とタイヤがアスファルトの上を転がる音くらいしか響かない。

ちらつと横を窺うと、ドアに頬杖をついてガラスの向こうを眺めている。通り過ぎる車のライトや街灯に照らされた極悪非道の顔は、はい、相変わらずイケメンです。

ある意味こんな残念な美形もないよね。口を開けば罵詈雑言しか出てこないなんて、遠くから見ているだけならいいかもしれないけれど、近くになんて絶対いて欲しくない。

確か上城東なら会社から車で20分くらいのはずだ。あの辺りは家賃結構高かったと思うけど、課長様は稼いでらっしゃいますものね

！。

なんか変なの。そういえば、課長とこうして二人きりになったのは、初めてかもしれない。

黙っていても、別に気詰まりではない。

これはお互い話す意思が無いってこと隠してないからなんだろうな。そんな微妙な沈黙を破ったのはやっぱり空気の読めない運転手さんのほんわかした声だった。

「お客さん、ローソン見えましたけど」

「ローソンの脇の道入ってもらえますか、ああ、そこでいいです」

もう着いたのか。あつという間だったような、長かったような、不思議な時間だった。

ドアが開いて、不思議な密閉時間が終わる。

早く降りたいけど乗降側に乗っている課長が会計してくれないと降りられない。もちろん私は1円も払う気持ちはありません。

上城東からだとう帰ればいいんだっけ？ 確か最寄駅は私鉄だったように思うけど、携帯で検索すればいいか。まだそこまで遅い時間じゃないし。

なんて考えていたら課長が会計をやっと済ませてくれた。遅いよ。やっと課長が降りてくれたから、私も降りるべくシートに手をついてお尻をずらして身体ごと乗降側のドアに近づいたら。

「行くぞ」

「きゃっ！」

不意にシートについていた手をさらわれて引っ張り出される。

ちょうど体重を手にかけていたから思いっきり前傾姿勢でつんのめるように車から降ろされてしまった。

「ちょっと何するんですか！」

危うくアスファルトの上で転ぶところだよ！

でも、怒りをこめて睨んだって極悪非道には通じないわけで。

「行くぞ」

「あの、ちょっと」

また強引に掴まれたまま歩きだす。……だけどさっきと違うのは掴まれているところが腕じゃなくて、手のひら、つまり、手を繋いでいるって、こと。そして、さっきよりもずいぶんゆっくりと歩いてくれているってこと。

「課長、私」

家になんて、行けません。そう続けようと思ったのに、遮るように課長が喋った。声はいつもの傍若無人さはどこへ行ったのかってくらい穏やかで。

「飯、食わせてやる」

何なの、一体どうなってんの？

いつもとは違う声に、私は何故か抵抗できずに大人しくついていくことしかできなかった。

課長の家は3階建てのマンションの2階だった。

帰ろう。この手を振り切つて帰ればいいじゃない。さっきみたいに
がっちり腕をつかまれているわけじゃないんだから。

だけど頭ではそう思うのに、どうしてか身体はちつとも動かなくて、
階段を上り課長がポケットからキーケースを取り出して鍵を開ける
様子までぼんやりと眺めてしまう。

そして促されるままに室内へと入ってしまった。

「座って待つてろ、すぐできる」

言うなり課長はソファに上着と鞆を投げ捨てるように置くと対面式
のキッチンへと向かう。

座れと言われたけれど、座る場所とおぼしきソファには上着と鞆が
ある。どけていいもんなのかな。ちよつとずらして、端っこに腰か
ける。黒い皮製っぽい見た目よりもふわふわした座り心地だ。

ソファの前にはこれも黒い木のローテーブルとでっかいテレビ。

ベッドが見当たらないし、壁紙と同じ色の引き戸があるから、隣が
寝室かな。そのままぐるつと室内を見渡してみる。なんかすごく片
付いてる部屋だ。物が極端に少ないし、黒い家具って結構ほこりが
目立つのに全然ない。

テーブルの上にあるのは昨日の日経新聞とテレビのリモコンだけで、
テレビの乗っかっている台にちょこんと小さな多肉植物の鉢植えが
飾られているくらい。

「おい、座るのそっちじゃなくて、こっち」

呼ばれてキッチンの方を向いたら椅子が向い合せにふたつついた小
さめなダイニングテーブルがあった。

「あ、はい」

慌ててそちらに座ると、キッチンのカウンターからよきつと手が伸びてきて、どん、と勢いよくお皿が目の前に置かれた。

「まず、それ食ってる。他のもすぐできるから」

……どうやら本当に、ご飯をご馳走してくれるみたいだ。

訪問（後書き）

あれ？ なかなか辿りつかない…。

1. 飯

目の前のお皿に盛られていたのは綺麗に並べられた白身魚の切り身の上に紫色のカイワレ大根と青ネギ、粒コシヨウが散らされたものだった。鯛か何かのカルパッチョかな。

言われた通りにテーブルに置いてあった箸を持ってはみたものの手をつける気になれず、それを眺めていたらまたキッチンの方から手が伸びてきた。今度置かれたのは小鉢がふたつ。青紫蘇やらみょうがやら、薬味がたっぷり盛られた冷ややっこ。

「何かける？」

「へっ？」

「豆腐。醤油でいいか？ 普段何で食べてるんだ」

「えっと、ぽん酢、です」

「わかった」

すぐに黄色いフタの瓶が差し出されて、慌てて受け取る。右手にお箸、左手にぽん酢を持った私には、全く今の事態が理解できていなかった。

本当にすぐ料理が出てきた。課長がキッチンへ行ってから10分と経っていないはずなのに2品も。確かにどちらも火を使わず調理方法が比較的簡単なものではあるけれど、同じことをしるって言われても私にはできない。なんでも出来ちゃうご立派な課長様は料理までも手際よくやかしてしまうのか。

茫然としていると、またによきつとカウンターから腕が伸びてくる。今度は湯気のたった木製のお椀。ごろごろと大きく切られた人参やら大根やら牛蒡やらが味噌汁の中から飛び出している。切ったばかりのみずみずしいネギと一味がきちんと乗せられていた。火の通った味噌とネギのいい匂い。

次々と料理が出てきて、あんまり大きくないダイニングテーブルの上はいつの間にかお皿で一杯になっていた。

カルパッチョに冷ややっこ、野菜たっぷりの味噌汁、トマトのマリネっぽいものがかけられた焼いた豚肉、そして石焼きじゃないピンパ。

統一感は何無だけど、共通するのはどれもすごく美味しそうってこと。

「なんだ、食ってないのか。いいから食え」

作り終えたの課長が向かい側に座ってから私も私はどれにも箸をつけることが出来なかった。こんなにたくさんの料理が目の前にあるのが久しぶりすぎて、食べる前からお腹がいっぱいだ。

そういえば最近何を食べていたっけ。お昼はコンビニか、会社近くのお惣菜屋さんのお弁当で、朝や夜は時間も食欲も無いからと食べなかったり適当にあるもので済ませたりしていたような。

いただきます、と柏手を打つように勢いよく手を合わせて、食べ始めた課長のお箸のひとすくいが大きい。一旦小皿にちよつと置くような仕草をするのだけれど、ほとんどそのまま口の中に収められていく。

男性の食事ってこんなに豪快だったっけ。思わず眺めてしまっていた私を見て、課長が微笑んだ。

ちよつと！ 失笑でも冷笑でもない笑顔、初めて見たんですけど！

「何呆けてんだ」

笑いながら私の手からぼん酢を取って、冷ややっこにかけてくれた。そのまま自分の分にもかけて、一口頬張る。

「へえ、ぼん酢もうまいな。俺はいつも醤油とごま油なんだけど」

これにラー油合うんじゃないか、なんて呟くとそのまま席を立て冷蔵庫から瓶を取り出してきた。た、食べるラー油常備しているんですか？

「うん、うまい！ ほら、食べてみろって」

食べるラー油がかけられた冷ややっこが私の前に押し出されて、促されるままに箸をつける。

冷たいお豆腐にたっぷり盛られた薬味とぼん酢の酸っぱさに食べるラー油の香ばしい辛さがすごくマッチしている。

「……おいしい」

「だろ」

得意げな笑顔がま、眩しすぎる。そうだよ、この人イケメンだったよ！

課長の顔から目を逸らして、出来たての料理に目をやる。

一口食べてしまったら、さっきまで影も形もなかった食欲がわいてきた。

今日はお昼ご飯だってまともに食べてない。空腹だったことを思い出したらあとはもう躊躇がなかった。

カルパッチョは思った通り鯛で、淡白な身にはオリーブオイルとガ

ーリックの風味が利いているし、お味噌汁はほっこり煮えた野菜がたっぷり。かりかりに焼かれた豚肉はベーコンに似た旨みと塩気が甘めのトマトと相性抜群。ビビンパに乗っているナムルはちゃんと種類ごとに違う味付けだ。

美味しいものを食べることが嫌いな人なんていないだろう。だから私は知らず知らずのうちに食事に集中してしまっていた。

でも一通り好きなだけ食べてふと気付くと、課長が微笑みながらこちらを見ている。

あれ、私極悪非道と普通にご飯食べてるよ。しかも手料理を！その不可解さに改めて気づいてしまったとたん、箸が止まってしまった。

「ん、もうお腹いっぱいになったか？」

優しい声色に、びくり、と身体がすくんだ。だって課長のこんな声、聞いたこと無いんだもの。

怖い。いや声は全然怖くないんだ。何だろう、恐ろしいというのが近い気がする。

得体が知れないものが目の前に、いる。

「もっと食べる。お前、最近全然食べてないだろう」

課長の腕が伸びてきて、私の左手を掴んで持ち上げた。腕時計が手首からするするっと肘の方へ落ちていく。こんなに時計のバンドのサイズ、緩くしていたっけ？

「こんなに痩せちゃって」

ここ最近体重計にのっていなかったから、痩せたかどうかなんて全然気づいてなかった。だけれどこうして見れば、明らかだ。一目瞭

然とは、こういうことを言っただろう。

私が見えて瘦せたから、ご飯をご馳走してくれたのだろうか。
普通の上司だったら、珍しい話じゃないかもしれないけれど、私の
向かいにいるのは極悪非道の荒川課長で、しかも自宅で手料理。

どう考えたって、有り得ないでしょ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7073v/>

さよなら、ベイバー

2011年9月2日00時31分発行